

ペルシア語を母語とする日本語学習者における 日本語のテンス・アスペクト習得の横断的研究

SHAHBAZI Yaser 日本語教育学分野・専門 博士後期課程3年

本研究はペルシア語を母語とする日本語学習者における日本語のテンス・アスペクト（時制・時相）の習得について、習得段階ごとに横断的に調査し、誤用の傾向と母語であるペルシア語の影響について明らかにするものである。日本語のテンス・アスペクトの研究は、庵（2001）など膨大な研究業績があり、非母語話者の習得研究も許（2005）など多くの研究成果がある。本調査は Khomeijani（1990）などで指摘されているペルシア語のアスペクト体系を参考にして、両言語のアスペクト体系の違いがペルシア語話者の日本語習得に与える影響を明らかにするものである。

本研究では特に「テイル」を中心に分析し、「テイル」の意味を「進行中」（犬が走っている）、「結果状態」（財布が落ちている）、「繰り返し」（毎朝ジョキングをしている）、「完了」（駅に着いた時、電車は出発していた）、「単なる状態」（彼女は母に似ている）の5つに分類するとともに、前節する動詞を語彙的アスペクトの違いによって分類した。これにより、①「テイル」の意味、②前節する動詞の語彙的アスペクト、③ペルシア語とのずれ、④学習者の習得レベルの4つの要因を分析の観点として、統計的に分析した。

被験者はイランのテヘラン大学で日本語を専攻している学生83名（1年生22名、2年生27名、3年生19名、4年生15名の4グループ）で、日本語の学習期間の別に実施した。本研究では(1)のような四者選択テストを実施して、選択率を調査した。テストの問題は、「テイル」の習得上テンスの影響を調査するために、過去形の「テイタ」と非過去形の「テイル」に違う語彙的アスペクト的性質を持つ動詞を前節した文章にした。さらに、副詞や文中の文脈などを使用して、以上提示した「テイル」の5つの意味が明確になるような、合計68問を作成した。問題数が多かったため、テストの問題を2つに分けて、各グループに2回、合わせて8回実施した。両言語のアスペクト認識をさらに正確に把握できるように、被験者に選択した日本語の動詞のペルシア語の動詞の活用も記入してもらった。

(1) 最近テレビの視聴率が（落ちる、落ちた、落ちている、落ちていた）。

これにより、学習者の文法的判断を見ると同時に、母語転移の可能性について明らかにすることができる。従来ペルシア語話者におけるこのように詳細な日本語のテンス・アスペクトの習得研究は行われておらず、本研究は日本語のテンス・アスペクトの習得研究にとって重要な位置を占めることができると考えられる。また、(1)のテストは日本語母語話者（33名）にも実施し、母語話者のテンス・アスペクトの認知システムとペルシア語話者の認知システムを比較することを可能とした。（現在分析中）

その結果、「テイル」の意味と動詞の語彙的アスペクトによって誤用のパターンや傾向が多様であることが分かった。例えば、最も習得しやすいのは、「進行中」の「テイル」に「継続動詞」が前接するところで、「完了」の「テイタ」の場合、学習者は動詞自体のアスペクト的な意味を分かっているにもかかわらず、「テイタ」と「タ」のアスペクト的な意味が区別しにくいいため、異なる習得レベルでも誤用を犯しやすいことを明らかにした。また、「変化動詞」や「状態動詞」の場合に学習者と母語話者の選択率の差が大きいことを明らかにした。

参考文献

- 庵功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4号、pp. 75-94。
許夏珮（1997）「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号、pp. 37-48。
Khomeijani Farahani, Ali Akbar（1990）*A syntactic and semantic study of the tense and aspect system of modern Persian*. PhD thesis, University of Leeds.